

近世災害情報論

善光寺地震情報はどのように伝えられたか

An Analysis of the Circulation of
the Disaster Information of Zenkoji Earthquake (1847)

北原系子

①近世情報構造のなかの災害情報

②善光寺地震の災害記録

③災害情報の流布

まとめ

【論文要旨】

本稿は、災害情報を近世社会の情報構造のなかに位置づけるための基礎的作業の一環である。先に、災害によって発生した地変を書き留めた絵図を中心に、絵図情報の発信主体、受け手などによって、領主支配層、領内村落支配層、個人、かわら版などの出版業者の四カテゴリーに分け、災害絵図情報の社会的機能を分析した（『災害絵図研究試論』『国立歴史民俗博物館研究報告』81集、1999）。前稿におけるこの情報の四カテゴリーを踏まえ、本論では1840年代後半から50年代にかけて頻発する巨大災害の先駆けを成した善光寺地震の災害情報全般の分析をまず試み、各所に書留として残る資料の大半が被災地域の支配者から幕府に届けられる被災届で占められていることを検証した。また、被災地情報を正規のルートに載せ、広く販売しようとする地震摺物の出版には、それに関わる一群の地方支配層と都市における儒学者や国学者などの知的交流を踏まえたネットワークの存在が不可欠であったことが明らかになった。さらに、被災地を遠く離れた都市では、災害情報に限らず珍事、その他事件を伝える情報を積極的に入手し回覧し合う町人、武士などの身分的制約から解放された同好グループが存在し、彼らの間では善光寺地震の情報が個人的興味に基づく差異を含みながらも、大半が支配層間で交わされる被災届などで占められていたことを明らかにした。

善光寺地震、安政元年（1854）地震津波、安政二年（1855）江戸地震では、災害情報は量的にも質的にもピークに達するが、これに重なってペリー来航後の風説留が全国的に展開する。災害情報は、幕末に向かって高まる階層横断的な政治的関心の昂揚、拡大、それらを書き留める風説留の膨大な蓄積の先駆けを成したとすることができる。